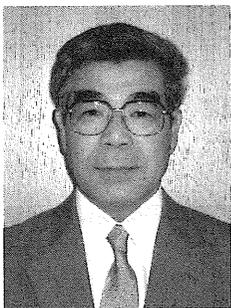


高専の技術者教育、少子高齢化社会、米百俵



高田 孝次

(長岡工業高等専門学校長)

新しい高専の技術者教育

全国の国立高等専門学校は平成一六年四月、独立行政法人国立高等専門学校機構のもとに統合されて新たな出発をいたしました。高専機構は学校数五五校、学生数約五万人を擁し、国立の高等技術教育機関としては国内で最大規模となっています。

高専制度は、昭和三〇年代の高度経済成長期において、特に工業分野の発展を支える人材の増強という社会の要請を背景に、中等教育段階を取り込んだ五年一貫の効率的な専門教育プログラムにより実践的技術者育成を行うことを目的とし、同時に、教育システムの複線化による技術教育体系の拡充・強化も意図する高等教育機関として創設されました。この狙いは見事に達成され、卒業生の活躍は産業界から高い評価を得て今日に至っていることは、現在、高専教育に携わる私共の誇りです。一方で、過去四〇余年の間に高専を取り巻く環境は大きく変化しました。世界をリードする位置に立った日本の製造業は、グローバルな視点を兼ね備えた、より高度な実践的・創造的技術者を求めることとなり、高専においてもこれに応えるべく努力が重ねられてきました。教育研究

活動における技術科学大学をはじめとする大学等との連携、専攻科の設置、地域産業界との連携を活用した実践的教育、さらにはJABEE（日本技術者教育認定機構）への積極的な対応、等々です。また、高専本科卒業の後、専攻科あるいは大学理工学部三年次へ進学する学生が次第に増加し、近年、その数は全卒業生の約四割に達しております。これも、学生が科学技術の進展や産業の動向を鋭敏に捉えていることの結果と見ることができ、このような変化の中、今後、高専は機構という新たな組織のメリットを活かして一層の教育改善・改革を推し進めることとなります。例えば、高専間の学生の移動を容易にすることも教育上有効な結果が期待できるのではないかと考えております。

このような変化の中で、今後も維持し高めていくべき高専教育の強みもいくつかあります。その一つは、専門教育と人間性教育を調和をもつて実施できる高い教育力です。この教育力を支える基盤は教員個々の力量であることは勿論ですが、有効な仕組みとしてクラス担任制度があります。担任教員は個々の学生をよく把握しており、学年が進んで学生が研究室に配属された後も指導教員とクラス担任の協力が自然に行われ、学生生活を支援します。この点は通常の大学とは大きな違いでしょう。また、多くの学生が学生寮での集団生活体験を持つことも学生の成長過程において貴重なプラス要素となっています。

さらに、創造性の涵養という観点からも高専の教育環境が有効と考えられる面があります。創造性は教え込むものではなく、環境を整えて開花を促すものと言われますが、大学生になってからでは創造性を引き出し育てるには少々時期を逸していると思われる。一五歳で入学し、その後はいわゆる受験勉強の枠に捉われることなく専門分野の勉強をし、クラブ活動も楽しめる高専の環境は、学生たちの創造性を育み個性を伸ばす場として、より優れているはずだと、私は常々思っています。中等教育段階を取り込むことによって生まれているこの高専の特性は、しかしながら、これまで十分に活かされてきたとは言いがたく、今後、大いに具体的な工夫が求められる点でありましょう。

昨年暮れ（平成一七年一二月）に公表された国勢調査の結果で、ついに日本の人口が減少に転じたことが明らかとなりました。統計的に予測されていたこととはいえ、現実の数字となって現れたことに少なからず衝撃を受けました。天然資源が乏しい我が国においては人的資源こそが国の発展の拠り所であることは改めて申すまでもありません。少子高齢化が深刻な社会問題と捉えられているのは、これが資源としての労働人口の減少に止まらず、今の社会環境のままでは若者個々人の人間力・活力の低下にもつながり、その負の相乗効果によって大きく国力を減退させることになるかと危惧されるからであります。現在、国を挙げて様々な対応策が講じられておりますが、この問題は一朝一夕には解決が見られない困難な課題です。日本が将来に亘って人口減少に伴うマイナスの影響を克服し、人的資源をその質的向上によって豊かにして自国はもとより世界に貢献する方策の根本は、やはり教育に求められるでしょう。「科学技術創造立国」を技術教育の面から支える役割を担っている高専は、ますますその使命の重さが増しているかと改めて確認させられた調査結果でした。

米百俵の精神

昨今、「米百俵」という言葉が比較的広く知られるようになりましたが、これは、もともとは教育こそ国の発展の基本であるとする精神を伝える故事で、幕末維新のとき長岡藩大参事として藩の復興にあたった小林虎三郎の逸話をもとに、山本有三が戯曲「米百俵」として世に出したものです。戊辰戦争で敗れ、三日に一度の粥も満足にすすれないほど困窮の極みにあった（虎三郎が弟雄七郎にあてた手紙）長岡藩に、枝藩の三根山藩（新潟県西蒲原郡の旧巻町、現在は新潟市）から救援物資として百俵の米が贈られてきました。戯曲の中で虎三郎は、ぜひ生活支援にと懇願する藩士達を前にして「まちが栄えるも減ぶもことごとく人にある。この百俵をもとに学校を建てたい。……そうすれば、百俵の米は後年には一万俵になるか百万俵になるか、いや、米だわらでは見積れな

い尊いものになる。その日ぐらうでは長岡は立ち上がれない、新しい日本は生まれない……」と説き、全てを学校建設に充てました。明治の揺籃期には、ほかにも類似の逸話があったのかも知れませんが、「米百俵」の戯曲により長岡の故事が特に有名になったものと思われれます。ちなみに、小林虎三郎は青年時代、藩命によって江戸の佐久間象山のもとに学び、同門の吉田寅次郎（松陰）と並んで「象山門下の二虎」と称された逸材で、師をして「天下の政治を行う者は寅次郎、わが子の教育を託せる者は虎三郎」と言わしめたと伝えられています。

明治維新の時と現在を比べるのは少し極端ではありませうが、戦後六〇年を経過し、様々な面で改革の必要性に迫られている今日、「米百俵」の精神に今一度思いをいたすのも意義あることと思えます。

高専で学ぶ留学生

最後に、高専で学ぶ外国人留学生について少し触れます。現在、五〇〇人を若干下回る程度の外国人留学生が全国の高専で学んでいます。圧倒的にアジア諸国出身者が多く、また、そのほとんどが、文部科学省国費留学生、ないしは、外国政府派遣留学生です。こうした留学生は高専の三年次に編入され、日本人学生とともに高専ならではの密度の濃い技術教育を受けています。彼等の成績は概して優秀であり、高専の本科を卒業した後は、ほとんどの留学生が専攻科や大学理工系学部の三年次へ進学し、さらには、大学院を目指す学生も多くおり、日本留学を成功裏に終えております。長岡高専にも現在二二名の留学生が在籍しており、彼らの存在は日本人学生に対して様々な好ましい影響を与えています。

残念な点は、高専の留学生が前記のように極めて少数にとどまっている現状です。産業のグローバル化は今後も進み、中でもアジア諸国との関係は一層強まることは必定であることを考えると、高専をもっとアジア諸国の技術者育成のために役立てるのは、日本とアジア諸国の双方にとって大いに益あることではないでしょうか。

高専の明快な教育目的と優れた教育力に誇りを持ち、更なる発展・進化を願う気持ちから、いささか我田引水、手前味噌な議論に走ったかと思いますが、何卒、ご容赦ください。